いわさきちひろ ぼつご 50 ねん　こどものみなさまへ

プレスリリース

安曇野ちひろ美術館

【展示タイトル】

いわさきちひろ ぼつご 50 ねん

こどものみなさまへ

あ・そ・ぼ

あれ これ いのち

みんな なかまよ

【展示会場・会期】

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　TEL.0261-62-0772

①	2024 年 3 月 1 日（金）～6 月 2 日（日）	あ・そ・ぼ
②	6 月 8 日（土）～9 月 1 日（日）	みんな なかまよ
③	9 月 7 日（土）～12 月 1 日（日）	あれ これ いのち

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042　東京都練馬区下石神井 4-7-2　TEL.03-3995-0612

①	2024 年 3 月 1 日（金）～6 月 16 日（日）	あれ これ いのち
②	6 月 22 日（土）～10 月 6 日（日）	あ・そ・ぼ
③	10 月 12 日（土）～2025 年 1 月 31 日（金）	みんな なかまよ

＊ちひろ美術館公式サイト　　chihiro.jp

【企画主旨】

ちひろから、いまのこどもと、かつてのこどもだったおとなのみなさまへ――

絵本画家・いわさきちひろが亡くなって、2024 年で 50 年が経ちます。この半世紀の間に、世界は大きく変わり、子どもたちを取り巻く環境も変わってきています。今の時代にちひろの絵が語りかけてくるものは……？

2024 年の 1 年間、ちひろ美術館（東京・安曇野）では、「あそび」「自然」「平和」の 3 つのテーマで、現代の科学の視点も交えてちひろの絵を読み解きます。展覧会のディレクターに、アートユニットの plaplax を迎え、子どもも大人も見るだけでなく参加したくなる、新しい展覧会を開催します。

●いわさきちひろ　1918～1974
福井県武生(現・越前市)に生まれ東京で育つ。藤原行成流の書を学び、絵は岡田三郎助、中谷泰、丸木俊に師事。第二次世界大戦後、紙芝居や教科書、絵雑誌、絵本など子どもの本を中心に画家として活躍。生涯にわたって子どもや花を描き続けた。1974 年没、享年 55。現存する作品は約 9600 点。

●展覧会ディレクター　近森基（ちかもりもとし）＋小原藍（おはらあい）（plaplax）

インタラクティブな作品制作を軸に、展覧会の展示構成、空間演出、映像コンテンツの企画制作など幅広く活動する。さまざまな手法やメディアを使って、創造的な学びや発見のある体験作りに取り組む。2018 年「いわさきちひろ生誕 100 年『Life 展』あそぶ plaplax」をちひろ美術館で開催。

無垢な子どもたち、美しい自然、平和への願い。
これらは、ちひろさんが生涯を通して描いたテーマです。

没後 50 年にあたる 1 年間、改めてこのテーマと向き合おうとしたとき、＜科学の目＞を通してみることを考えました。とはいえ難しい知識や情報を駆使するわけではありません。目の前のものの”ありのまま”をよく見て受け止め、そこから出発する。科学の目は、特別な人が難しいことを考えるためのものではなく、だれもが見慣れた風景を、新たな発見にあふれた豊かな世界に変化させるまなざしだと思ったのです。本来子どもたちは、そんな風に世界を見つめているかもしれません。

会場で作品を見たり触れたり、体を動かしたり。子どもも大人も「わあ！これはなんだ？」とわいわいいっしょになって進んでいく。そんな展覧会のあり方を目指しました。

plaplax　絵の具の足あと　2018 年

●グラフィックデザイン　岡崎智弘（おかざきともひろ）

広告代理店、デザイン事務所勤務を経て、2011 年 9 月よりデザインスタジオ SWIMMING を設立。グラフィックデザインの姿勢を基軸に、印刷物/映像/展覧会など視覚伝達を中心とした領域を柔軟につなぎながら、仕事の規模を問わず、文化と経済の両輪でデザインの活動に取り組んでいる。

いわさきちひろ ぼつご 50 ねん　こどものみなさまへ

あ・そ・ぼ

2024 年 3 月 1 日（金）～6 月 2 日（日）

　いわさきちひろの絵のなかの子どもたちは、なんでもあそびにしています。ぬいぐるみを友だちにする子、雨の日に水たまりであそぶ子、そうじまであそびとして楽しんでいる子もいます。子どもはあそびながら、世界を探索し、知識を獲得していきます。

　本展では、あそぶ子どもたちを描いたちひろの絵を発達心理学の視点から読み解くと同時に、アートユニット plaplax によるインタラクティブな作品も用いて、美術館で絵を見ることをあそびにします。絵を見るための遊具や、体全体を使ってちひろの絵のなかに入る作品なども登場します。のびのびとちひろの世界を楽しみながら、子どもの今と未来について考える展覧会です。

●企画協力：森口佑介（もりぐちゆうすけ）（京都大学准教授／発達心理学、認知科学）
専門は発達心理学・発達認知神経科学。子どもを対象に、認知、社会性、脳の発達を研究する。また、保護者や子どもにかかわる仕事をしている人への講演等を通じて、子どもの発達に関する知見を広く発信している。

　大人にとっては仕事が生活の中心ですが、子どもにとって生活の中心はあそびです。心理学では、子どもはあそびを楽しむことで毎日を元気に過ごすことができ、大人になる準備をしていると考えられています。また、子どもは、どんなつまらないことも、あそびにして楽しむことができます。いわさきちひろの絵は、このような子どものあそびの本質をしっかりととらえています。なにより、子どもの視点からあそびを描いているところがちひろのすばらしさです。本企画では、このようなちひろの絵を、みなさまにあそびながら見ていただきたいと思っています。

絵をかく女の子　1970 年

黄色い風船を持つ少年　1968 年

そうじをする子ども
『ひとりでできるよ』（福音館書店）より　1956 年

いわさきちひろ ぼつご 50 ねん　こどものみなさまへ

みんな なかまよ

2024 年 6 月 8 日（土）～9 月 1 日（日）

「“みんな仲間よ”私は自分の心にいいきかせて、なつかしい、やさしい、人の心のふる里をさがします。絵本の中にそれがちゃんとしまってあるのです」

いわさきちひろは、絵本づくりに重ねてこんなことばを残しています。彼女の絵本には平和をつくるためのひみつが隠されているのかもしれません。ちひろの絵やことばを通して、ひとりひとりが平和を見つめれば、たくさんの答えが出てくるでしょう。

本展では、インクルーシブデザインの考え方を取り入れ、ちひろの絵を起点として、子どもから大人まであらゆる人が、ひとりひとりの個性を尊重し、ともに平和を築いていくための手がかりを探します。

●企画協力：塩瀬隆之（しおせたかゆき）（京都大学准教授／システム工学、インクルーシブデザイン）

日本科学未来館ロボット展リニューアルで問いの監修、徳島県立博物館リニューアルでインクルーシブデザインの観点から監修するなど、多様な人を深い学びに誘う「問い」のデザインを探究し続けている。

「平和のはんたい」を考えるとしたら、みなさんはどんなことばを思い浮かべますか。もし「戦争」や「争い」といったことばを使わないとしたら、どんなことばを頼りにしますか。いわさきちひろにとって、心を痛めたであろう戦争について直接扱った作品は多くはなく、それ以上にただ子どもを描き続けたのです。

「子どもは、そのあどけない瞳やくちびるやその心までが世界じゅうみんなおんなじ」。子どもの絵本を描いてきたちひろならではのこの視点こそ、本企画で平和と向き合う拠り所です。何か人生のかなしいときや、絶望的になったときに、絵本のやさしい世界を思い出してほしいというちひろの声が、平和に向き合うわたしたちの力になると信じて。

左　そっぽをむく少年
右　そっぽをむく少女
『となりにきたこ』（至光社）より
1970 年

左　ピンクのセーターを着た少女
右　水色のセーターを着た少年
『となりにきたこ』（至光社）より
1970 年

いわさきちひろ ぼつご 50 ねん　こどものみなさまへ

あれ これ いのち

2024 年 9 月 7 日（土）～12 月 1 日（日）

　いわさきちひろが東京・下石神井で暮らし、絵を描いていた 50 年以上前、日本は高度成長期のまっただなかでした。開発の名のもと、木々は切られ、川は埋められ、それまで見られた草花や生きものも減っていきました。ちひろは、「私は私の絵本のなかで、いまの日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています。」と語っていますが、そこには、身近な自然が失われていくことへの危惧も含まれていたのかもしれません。
それから 50 年が経ち、多くの生きものが日々地球から消えつつあります。ちひろの絵を通して、人間以外のいろいろな「いのち」となかよく生きるにはどうしたらよいか、楽しく考えていく展覧会です。

●企画協力：鷲谷（わしたに）いづみ（東京大学名誉教授／生態学、保全生態学）
理学博士。みどりの学術賞、日本生態学会功労賞などを受賞。筑波大学、東京大学、中央大学で生態学・保全生態学の研究と教育に従事した。主な著書は、『にっぽん自然再生紀行』、『さとやま―生物多様性と生態系模様』、『生物多様性入門』（以上岩波書店）など。

　生物多様性条約の世界目標は「自然との共生」。遠い昔からのヒトと自然との共生の場であったのに今はほとんどが失われた「野」。絶滅危惧種を含む野の花やワラビに子どもたちが親しむ情景が描かれた貴重な絵を鑑賞し、実物の植物がつくる小さな空間「自然共生ガーデン」で実感していただければと思います。ちひろさんの絵の魅力をひきたてている紫色は、生態系における植物が動物と共生関係を結ぶために進化させた花や熟した果実の色。赤から青までの濃淡さまざまな紫色を、共生の色として感性と知性で楽しむ展示もできればと思います。

ぶどうを持つ少女　1973 年

秋の花と子どもたち　1965 年